Ibsen から Synge へ—*The Well of the Saints* 試論—

徳　永　　哲

1.

アイルランドの劇作家 John Millington Synge は劇作品においてアイルランド西部独特な世界を描き出していて，ヨーロッパ大陸の近代劇の潮流からは，幾分逸脱しているように考えられている。その理由として，ヨーロッパ近代劇の主流が Ibsen を中心にした都市の社会派リアリズムであったのに対して，Synge はアイルランド西部というヨーロッパでも辺境の地の，しかも，社会からは隔絶した自然の中で生きる人間の姿を描いているということをあげることができる。特に *Riders to the Sea* はアイルランドの特異性そのものが描き出されている作品であると思える。

しかし，*The Shadow of the Glen* や *The Well of the Saints* に限って考えるとき，明らかに，アイルランドの特異性を見ることができるが，同時にヨーロッパ大陸の近代劇の潮流の中に在ると考えることもできるのである。すなわちこれら 2 作品にはどちらともいえる二面性が在るのである。Jan Setterquist は *Ibsen and the Beginning of Anglo-Irish Drama* で Ibsen と Synge の作品の影響関係を探求している。少々強引に思えるその論文では *The Well of the Saints* と *The Wild Duck* と結び付けて論じている。両作品を結び付けるものとして Setterquist は "life-lie" をあげている。[1)]

Ibsen 流の虚偽に満ちた生活の暴露をあたかも Synge にとっても共通のテーマであったかのように論じることはかなり危険を伴った冒険であるように思える。このように，無理に問題を取り上げて論じるまでもなく，もっと大きな見地に立って上の二作品を考えるならばヨーロッパ大陸の近代

劇の潮流の中にあることを十分に伺い知ることができるのである。すなわち，それらの作品の世界が僻地の人気のない，非社会的な場所であっても，都会のリアリズムに共通した問題が提起されていると見なすことも可能であるからである。

近代劇の有する個人と社会の対立であるが，それに必ず絡められるのが〈宗教〉である。アメリカの O' Neill の作品，特に *The Desire under the Elms* にみられるように，個人の自由と対立しているものはまさに〈宗教〉であり，〈神〉であったりする。〈宗教〉，特にキリスト教の問題は近代劇の主要なテーマの一つを形成したと言えるかもしれない。とはいえ，勿論，近代劇は〈宗教〉そのものを論じるのではなく，あくまで，それの社会や生活との関わりはどうであるのか，また近代人の意識とどう関わっているのか，といった現実的な問題として，〈宗教〉を吟味，精査するのである。

近代劇の祖と称されている Ibsen にとって〈宗教〉と〈個人〉との関わりは重大なテーマであったが，Synge には，違った形ではあるが，〈社会〉というものを問題とせずに〈宗教〉と〈個人〉とのかかわりを暗示的に作品の奥深い所に見いだすことができるのである。Ibsen の場合は，〈宗教〉がいかに〈社会〉とかかわり，〈個人〉の自由とどのように対峙しているかということが厳密に問い詰められているのに対して，Synge の場合は，宗教は自分自身の信仰上の問題であって，受諾か拒絶かいずれかの選択というきわめて個人的な問題に止まっていると考える。

Ibsen は作品において，自由と理想の問題を，再現された仮構の世界で細かく精査し，鋭い批判の目をキリスト教教義の社会とのかかわりの実際面に向けたのである。Ibsen は〈宗教〉に対して非常に批判的であり，場合によっては挑戦的でありさえする。*Ghosts* において，個人の意志や自由を阻むものは，牧師など発言力をもった人々によって強調される「義務 (duty)」であり，この言葉によって人々は因習的社会の中に閉じ込められてしまうのである。

近代社会は科学を土台に据え，民衆を宗教的なヒエラルキーから解放し

た。宗教的な拘束や封建的な世襲制度も無くなったはずであった。しかし，Ibsenは与えられた自由は真の自由とはみなさなかった。自由とは自らが意志するものなのである。近代人に求められるもの，それは真の自由を勝ち得ようとする「意志（will）」の力なのである。しかし，Ibsenの視点からでは，民衆の心は旧態依然とした隷属に甘んじ，自由ではないと見えた。自由への意志が無いところでは，保守的な道徳家が美しい言葉を隠れ蓑にして虚偽を世に蔓延させていくのである。民衆の意識は困難や試練に耐え，理想を貫くことよりも，安易に妥協し，自ずと堕落への道を歩んでいると見えたのである。Ibsenの提起した問題劇とは，そうした妥協や堕落をあからさまにすることを目指していた。19世紀後半に進化論と共に一大センセーションを巻き起こした「遺伝の法則」も，Ibsenにかかっては家庭内の虚偽と欺瞞を暴く強力な武器となったのである。

2.

SyngeはIbsenのように，近代人の自由や理想への意志の問題を作品の主要テーマとすることはない。Syngeの判断はキリスト教義に深く浸透されており，自由であろうとすることは常に〈異端〉と結び付いていた。幼少のころ父親を失ったSyngeは祖母（Anne Traill）と母親（Kathleen）から厳格なキリスト教義を教え込まれて育った。[2] Kathleenの信仰心は極めて強固なものであったらしく，その教義は緻密に構成された体系を形作っていた。天地創造から始まって，エデンの園からの追放，人間の堕落，イエスによる贖罪，救済そして最後の審判と楽園の回復に至るまで一つの体系としてまとめられ，完全な世界として物語られたのである。そして，現在は悪魔の支配する時代であり，悪魔の誘惑を神の試練として耐え，死後も最後の審判のときを待ち，やがて天国へ導かれるということを固く信じていた。Syngeは幼いころ，母に教え込まれていた地獄の観念にひどく悩まされ，自分が地獄に落ちてどうにも取り返しがつかなくなり，永遠の苦しみの中から抜け出られないのだと思い込んで一晩中泣きとおしたことがあった。翌朝，寝床で泣いているSyngeを見た母が，罪を

改悛させた聖霊によってその涙が流されているのだと言って慰めたということである。幼年期から少年期にかけてのこうした宗教的体験は精神的にも肉体的にも，成人した後に至っても負い目として Synge に影を落としてしまったのである。

さらに，Synge は外界との接触を避けて育てられた。Kathleen はキリストの再臨をシンボルとして考えていたのではなかった。真実キリストが再臨し，最後の審判があり，エデンの園が回復されると信じていたのである。しかも，現在は悪魔たちが解き放たれた時代であり，その時代をどうしようともすべて無駄である。キリスト再臨の時まで悪魔との接触を避けて，教義を守って生きる以外に手段は無いと信じていたのである。小作農民や季節労働者との接触のない Orwell Park や Greystones など同じ階級のプロテスタントだけが住んでいる所で暮らした。Synge はそうした環境の中に閉じ込められたような状態で，ほとんど自然だけを友として育ったのである。自然から糧を得ている人々とはまったく接することなく，また，外の世界をまったく知ることなく，母の完璧に近い防御の中で教育されたのである。Synge は大体14歳になるまで，教義によって捏造された世界をあたかも真実の世界であるかのように思っていたであろうし，生活の特権的意識を疑うことはなかった。

Synge が16歳の時，彼が家族から遊離する決定的な出来事が起こった。地主の特権階級に属していた一家は，小作料の払えなくなった小作人に対して「追い立て」を行っていたのである。[3] Synge は母に小作人を追い立てることの不正を主張したが，母は地代が入らなければ自分たちの生活はできなくなると主張した。Synge はそれに対して適当な言い返す言葉がみつからなかったらしい。兄の Edward は不動産の仕事をしていたのであるが，母の言うなりになって，小作人の追い立てを次々と実行したのである。Edward は巧妙な手口で追い立てたらしいが，特に Wicklow の Hugh Carey 一家を追い立てた手口は極めて巧妙であったらしい。その手口は当時のアイルランドで行われていた代表的手口であったらしい。その手口とは，土地と無縁の渡り労務者らを雇い，小作人を家から追い出した

後にすぐにその労務者たちを送り込み，追い立てられた小作人が隣人たちの力を借りて利権の回復をする隙を与えないようにしておいてからその家は取り壊さないだけの値打ちがあるかどうかを調べ，いずれの見込みもたたなければ，燃やしてしまうというものであった。Hugh Carey の一家もこの手口でやられた。Hugh は二人の姉妹を養っていたが，そのうち一人は痴呆であった。Edward は容赦することなく，警官の警護のもと，Carey 一家を追い立て，その数日後に家を燃やしてしまったのである。この Edward の冷酷な追い立てに対して Synge は母 Kathleen に抗議したが，特権階級の利益のためばかりでなく，道徳的正義に基づいてなされたと請け合ってもらえなかったらしい。この出来事は母 Kathleen への不審を募らせ，さらにキリスト教義への不審へとつながっていったのである。寛大さを欠く偏狭な精神への反抗は決して外に向かって爆発しはしなかったけれども，Synge の内奥にしっかりと根を下ろしたのである。

18歳になって Synge は教会へ行くことをはっきりと拒絶した。[4] 母 Kathleen のキリスト教義の届かぬ世界に生活の場を求め，家族から遠い孤独な世界を自ら求めるようになった。悪魔のように見られていた外の世界の貧しい農民たちが，むしろ親しみのもてる人々であったのである。アラン島で体験した島民の生活は彼の人生を変えるほど強烈なものであった。しかも，島民たちはカトリックであるが，彼が育った環境のキリスト教とは全く異質のものであった。そうした異質な世界との出会いから *Riders to the Sea* を書いたが，それは悲惨な生活を再現してはいるが，異質な世界への思い入れと感動が作品に溢れている。

Synge は，Ibsen が問題視したような，〈社会〉という個人を超えた集合体の中で宗教というものがどのようにかかわっているか，ということを問題視してはいなかった。宗教は絶えず自己とのかかわる範囲で問題であり，どこまでも個人的な問題であった。しかし，*The Well of the Saints*[5] になると対立する二つの世界があり，葛藤と反抗が描き出されているのである。この作品の背景には Synge の少年，青年時代の体験が見え隠れするように思える。Carey 一家の「追い立て」に象徴されるような，一方で

は冷酷，無慈悲それに加えて「正義」，また一方では飢えと無残な生活，両極端が存在し，誰もいかんともしがたい現実がある。そして，権力をもって正義を行使した側が自分の家族であったということ。容認し難い現実と払拭したい家族の傲慢さ。Synge は非難のその矛先を家族へ直接向けることはしなかった。盲目の夫婦 Martin Doul と Mary Doul をそこから産み出し，二人の傲慢さ，偏狭さ，俗っぽさを描き出すことによって，そして，共同体から追い出される結末をつくることによって，傲慢，無慈悲な家族とのつながりを払拭したかったのかもしれない。

3.

そこで *The Well of the Saints* の筋を追いながらその点を考察したい。

幕があがると，盲目の Doul 夫婦が四辻の傍らに現れて，座り，通行人の施しを待っている。この夫婦は風雨にさらされて汚れており顔や姿はみるからに醜いが，二人は自分たちのことを人も羨む美男美女夫婦であると思い込んでいる。Mary は自惚れが強く，その自惚れから出る言葉は事実と一致せず滑稽である。彼女は自惚れから，通行人のからかいや悪ふざけが，やっかみから行う俗っぽい性悪ないたずらであると思い込んでいる。Martin は通行人の噂話に耳を傾けては Mary に対して抱く幻想を揺るがしている。彼は自分の目でもって Mary の美しさを確認し，疑いを取り除きたいと思うようになる。

> 闇の中でいつも思うのだけれども，一目ちょっとでもいいから，自分の姿をみることができれば，おれたちが東国七州きってのいかす男と一番の美女であることを確かめることができるんだがなあ。そうなりゃあ，目明きの馬鹿野郎どもは悪らつな噂をするのをやめるだろうし，おれだってあいつらの話しに耳を傾ける必要もないんだが。
> (I do be thinking in the long nights it's be a grand thing if we could see ourselves for one hour, or a minute itself, the way we'd know surely we were the finest man and the finest woman of the

seven countries of the east- [bitterly] and then the seeing rabble below might be destroying their souls telling bad lies, and we'd never heed a thing they'd say.)[6]

Martinは目の見える人々の噂や情報の獲得には余念がないが，しかし，目の見える人々は愚かで信頼できないと思い込んでいる。この矛盾を一気に取り払うことができるのは自己が幻想の中に見ている美をみんなに明らかにすることなのである。Syngeの母Kathleenがキリスト者としての独善的な生き方，あるいは熱烈な信仰のために，常軌を逸した観念の虜になってしまっているその姿の皮肉に満ちたパロディーを見ることができるのである。

このMartinの挑戦的姿勢は滑稽なアイロニーを生み出すことになる。二人はティミイからその四辻で「奇蹟」が起こることを知らされる。しかし，二人は「奇蹟」の意味が理解できずに，強盗に殺された老人の話や，泥棒が縛り首になった話などと同じように，想像で物を見る盲目の者には縁のない話だと思ってしまう。「奇蹟」も「強盗」も「泥棒」も二人に想像のつかないものである点では同じなのである。二人の関心事は自分たちが幻想の中で見ている美を証明する事だけなのである。

いよいよSaintが四辻にやって来て「奇蹟」を行う時がきた。その直前にちょっとしたエピソードが挿入されている。それはMolly Byrneという元気のよい，若く美しいが，宗教にはほとんど縁の無さそうな女が登場し，MartinにSaintの外套を着せる場面である。彼女はMartinに鈴を持たせ，「ご立派な聖人様だ（Isn't that a fine, holy-looking saint, ...?)」[7] と言って，ふざけ，からかう。このちいさなエピソードは悪ふざけの中にMartinの存在を位置付けている。Martinを形容するにふさわしい語は〈低俗〉である。異端的な傲慢，自惚れ，思いあがりを象徴しているかのようである。その彼が聖職を表す服装を纏い，有頂天になって笑いものになる。心の貧しいものが煽られ，のせられて有頂天になるその姿にこそ，Syngeは閉鎖された世界で自分たちを善人と信じ切っている家

族の像を反映させたのである。

家族はキリスト教徒として信仰深く，教義をきちんと守っているのに，しかも教養もあり，地主という特権階級に属しているのに，Synge の目から見ると Martin のような存在であったのである。Synge はすでにアイルランドの新しい歴史を察知していたのかもしれない。追い立てを強行するということ自体すでに地主特権階級はすでにその地位は脅かされていることの表れである。地主特権の社会制度はすでに崩壊の危機にさらされていたのである。

選民思想を抱いて，自分たちだけが神の救いを受けるに値すると信じて，自分たちの生活のために小作人たちを見捨て，平気で犠牲にすることは，Synge から見ると極端なエゴイズムであり，信仰はそのエゴイズムを正当化するものでしかないのである。Synge にとってそれは堕落であり，傲慢であり，正義に反する行為なのである。

続く Saint が実際に登場する場面ではパロディーから一転して，厳粛な儀式になる。Saint は外套をまとい，Martin と Mary に奇跡を施すために教会へと導く。

> 太陽や月の光を，また神様にお祈りを捧げている聖人たちの御姿をこれまで一度も見たことがなかったとは，さぞかし辛い暮らしであったであろう。しかし，逆境にあってもおまえたちのように勇敢に生きている者こそが，今日神様が目が見えるようにしてくださる賜物を立派に役立ててくれるものと信じている。
> (It's a hard life you've had not seeing sun or moon, or the holy priests itself praying to the Lord, but it's the like of you who are brave in a bad time will make a fine use of the gift of sight the Almighty God will bring to you to-day.)[8]

この〈せりふ〉にはキリスト教よりもケルト的な宗教性が表現されており，同時に Synge 自身の宗教観の表現でもある。それはまたアイルラン

ドが自己のアイデンティティを追求する新しい時代を迎えようとしているそのときにあって，凋落して行く家族へのメッセージとも取れるのである。

目が見えるようになったMartinが教会から出てくる。彼はMollyとMaryを取り違えてしまう。Mollyの美しい肌と髪に魅せられ，彼女の体に触れようとする。Mollyに罵られ，みんなから馬鹿にされ，笑い物になってしまう。続いてMaryが教会から出てくる。二人は互いに顔を見合わせ，幻滅して罵り合う。

Martinの見る世界は極端に狭い，低俗な世界である。狭い人間関係だけを見て，もっと大きな世界，自然の中で感動を共にして生きる世界を見ようとしない。Saintの〈せりふ〉，すなわちSyngeのメッセージは続く。

> おまえたちに目が見えるようにしてくださった神様が，おまえたちの頭にほんの少しでもよいから分別を与えてくださるように祈ろう。おまえたちは分別がないもんだから，哀れな罪人である自分たちの顔形ばかり見ようとするが，そんなものではなく，大きな山間を貫いて光を放ち，険しい奔流となって海にそそいでいく神の御霊の輝きに目をむけなさい。
>
> (May the Lord who has given you sight send a little sense into your heads, the way it won't be on your two selves you'll be looking-on two pitiful sinners of the earth-but on the splendour of the Spirit of God, you'll see an odd time shining out through the big hills, and steep streams falling to the sea.)[9]

Saintのこうした崇高な〈美〉への誘いは，自然の崇拝であり，神もその中に在るという思想を表している。すなわち，閉鎖された狭い世界で選民思想だけを抱いて生きていて，外界の者には自分達の利益になることならどんな醜いことも平気でする人々に対するSynge自身の独特な信仰の世界，あるいはSyngeがアイルランド西部で発見共鳴したケルト的なキリ

スト教への誘いでもある。Synge は閉鎖された世界に生きている人々に対して，非難するのではなく，自分の世界へ誘うのである。その点は Ibsen と非常に違っている点である。それは *The Shadow of the Glen* で Tramp が Nora を自然の中へ誘い出したあの誘いである。それはまた Synge 独特な現代文明への批判でもある。

Synge は Saint の説く世界が，人間関係だけに囚われている閉鎖された世界といかに掛け離れたものであるかを示すために，〈季節の循環〉を巧みに利用している。この劇の季節は第 1 幕では秋の終わり頃であり，第 2 幕は冬，第 3 幕は冬から春の初め頃にかけてである。夏が欠けている。聖人の「御霊の輝き」(the splendour of the Spirit of God)[10] は初夏から夏にかけて見ることのできる自然の美しい光景であろう。Martin と Mary はどんよりとしたアイルランド特有の曇り空が続き，冷たい風が吹きさらす冬になろうとしているまさにその時に Saint に奇跡を起こしてもらった。目は見えるようになったが，盲目の闇の世界での想像で思いも及ばなかった殺伐とした世界がそこに在った。

> 毎日，毎日，寒い厭な日ばかり続くねえ。盲目だと山の上を流れるあの灰色の雲を見ないですむのが幸いだと思うようになったよ。
> (...it's a raw, beastly day we do have each day, till I do be thinking it's well for the blind don't be seeing them grey clouds driving on the hill,.)[11]

Martin は冬という季節の過酷な体験をいきなり強いられたことになる。

Martin は目が見えるようになったが，盲目の頃に身についた乞食根性から抜け出すことができず，怠惰で，労働に従事することができない。乞食とは Synge の視覚では特権階級の位相である。

第 3 幕では Doul 夫妻は再び盲目になっている。二人の風景は第 1 幕と同じであるが，違っているのは盲目に戻った二人が目が見えるようになることを望んでいないということである。以前と同じように二人は独特な世

界に強く結合し，ペチャクチャとしゃべるだけの生活に歓びと幸福をみいだしている。しかし，その幸福もつかの間である。二人が永久に目が見えるようにするために，Saint が再び現れる。Saint は無理矢理二人を跪かせ，聖水をかけて奇跡を起こそうとする。しかし，以前見えるようになった時に Martin が体験したものは，暗い吹きさらしの冬であり，人の心の冷淡さであった。Martin は奇跡を拒絶して絶対に跪かない。

空虚な説教と欲しもしない奇跡を強要され，追い詰められた Martin は「聖水」をはねのける暴挙に出る。こうした拒絶と暴挙は，先の閉鎖的な世界と自然の対峙の図式化を台なしにする。Martin のその行為には反キリスト教的な Synge 自身の信念が反映されているようにも思える。宗教の拒絶は反世界的行為であり，民衆と敵対する行為である。*The Shadow of the Glen* では文明の内側と外側という対峙する図式が明らかであり，Synge は Tramp を通して外側を選択した。ところが，*The Well of the Saints* では Saint が外側の素晴らしさを説き，低俗な Martin は自然に対して心を開こうとはしない。しかし，民衆の敵となって孤立し，外へ出て行くのは Martin なのである。この結末の部分はこの劇の解釈を複雑にしている。

Martin には *The Shadow of the Glen* の Dan と Tramp の二人が集約されているように思える。すなわち，Synge が批判した閉鎖的世界と Synge 自身が求めた自然の中の孤独の二つの矛盾した世界が反映されているように思える。しかし，追放される Martin の姿は，シングの，一族の幸福と繁栄だけを願う家族への批判であると同時に家族の末路への予見であると考えるのである。

注

1) Jan Setterquist: *Ibsen and the Beginnings of Anglo-Irish Drama 1.*, Gordian Press,1974.
2) A. Carpenter (ed.) : *My Uncle John, Edward Stephens's Life of J.M.Synge,* Oxford University Press,1974.

3) Green and Stephen: *J.M.Synge 1871-1909,* Macmillan. p.13
4) A.Carpenter (ed.): *My Uncle John, Edward Stephens's Life of J.M.Synge,* Oxford University Press,1974.
5) *Synge, The Complete Plays,* Eyre Methuen.
6) 同上. p.133
7) 同上. p.139
8) 同上. p.141
9) 同上. p.146-7
10) 同上. p.146
11) 同上. p.148